

氏 名	やまぐち わだ いくこ 山 口 (和 田) 郁 子
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文 博 第 368 号
学位授与の日付	平 成 18 年 7 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	文 学 研 究 科 歴 史 文 化 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	マスリパトナムとゴールコンダ王国 —— 17世紀インドの港市支配に関する研究

論文調査委員	(主 査) 教 授 濱 田 正 美	助教授 久 保 一 之	助教授 中 砂 明 徳
--------	----------------------	-------------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

マスリパトナム Masulipatnam (Machilipatnam) は、インド東岸のほぼ中央に位置する港市である。この港市は、16世紀後半から18世紀にかけてコロマンデル海岸の北部の中心港として栄えていた。特に17世紀には、ベンガル湾沿岸各地の港のみならず、インド洋西海域や紅海・ペルシア湾の諸港との間にも交易関係を持ちつつ、一大交易港として繁栄した。その当時、マスリパトナムは、デカン・ムスリム五王国のひとつであるゴールコンダ Golkonda 王国 (1518-1687) の統治下にあった。そして、内陸後背地を支配したゴールコンダ王国の中心部との間に緊密な関係が築かれ保たれたことが、マスリパトナムの交易港としての発展と繁栄に大いに寄与していた。本研究は、港市マスリパトナムと内陸後背地を支配した王国の政治権力との間のこのような関係に注目し、その結びつきの実態をより具体的に明らかにしようとするものである。

マスリパトナムにおける支配体制の概略や、統治に関わる重要な役職等について触れた研究はこれまでもいくつかあるが、それらはいずれも少数のヨーロッパ人の手になる旅行記に大きく依拠している。そのため、具体例に乏しく、時期や情勢による変化については考慮されていない。これに対して本研究では、17世紀初めからマスリパトナムに商館を持っていたオランダ東インド会社 (Verenigde Oostindische Compagnie) の社員たちが継続的に書き送り、現在はオランダ国立文書館 (Nationaal Archief) に所蔵されている報告書・文書類を利用することによって、できるだけ多くの事例を収集するように努めた。また、港市および海上や沿岸地域における事象に詳しいこれらの史料に加えて、本研究ではゴールコンダ王国の年代記をはじめとするインド側史料も併せて用いた。視点や性質の異なる両者の史料を併用することによって、港市とその後背地の王国の出来事を共に視野に入れ、両者の連関をより明らかにすることを目指したものである。このようにして17世紀初めからゴールコンダ王国滅亡までを通して見ると、当時の政治権力者たちによる港市での活動に対する関与の程度や方法は、政治情勢、統治に携わった個々人の持つ背景や条件、あるいは交易相手の諸港の状況など様々な要因によって変化していたことがわかる。

以下に、本論の構成にしたがって各章節の概要を述べる。

第1章「マスリパトナムのハヴァールダール」では、マスリパトナムにおいて徴税を主とする業務を請負い、事実上この地の管理人として力を振るったハヴァールダール (ḥawāldār) について取り上げる。まずⅠにおいては、1610-20年代のハヴァールダール経験者についての情報を整理し、各人の在任期間、役職請負時の契約条件、交代時の事情と任命者との関係について分析を加える。ハヴァールダールはマスリパトナムにおける業務を、その任命者 (サル・ハイルやミール・ジウムラなどの地位にある王国の有力者である場合が多かった) から請負った「個人的な請負人」であった。そしてハヴァールダールにとって任命者との関係はきわめて重要であり、また後者の異動や失脚などの影響を受けてハヴァールダールの交代が起こることもあった。

Ⅱにおいては、1620年代に2度にわたってハヴァールダールを務め、その後サル・ハイル (sar-khayl) の地位に昇ったムッラー・ムハンマド・タキー・タフリシーに注目する。彼は時のミール・ジウムラ (mīr-jumla), マンスール・ハーン

・ハバシーとの密接な関係を利用して都での高い地位を獲得する一方、マスリパトナムには自分の兄弟をハヴァールダールとして送り込み、ここを確実に支配した。また、船を所有して交易を行い、オランダの持ち込む商品を独占的に買い入れるなどして、経済活動にも積極的に関わった。また、ムハンマド・タキーマンスール・ハーンに取って代わったように、当時は有力なハヴァールダールとその任命者の間には一種のライバル関係が存在することもあった。

第2章「ミール・ムハンマド・サイードとマスリパトナム」では、ムハンマド・タキーマンと同様にハヴァールダール職を踏み台として高位に上り、より長く大きな権力を握っていたミール・ムハンマド・サイード・アルディスターニーについて取り上げる。まずⅠでは、彼が台頭する直前の1630年代前半のマスリパトナムの状況について概観した後、1045/1635-36年にマスリパトナムの、その翌年にはムスタファナーガル地域全体のハヴァールダール職を得た彼のマスリパトナムおよび宮廷における活動について見る。さらにⅡでは、サル・ハイルとなったミール・ムハンマド・サイードがゴールコンダ王国宮廷との関係を如何にして強化し、利用したかについて述べる。この時期には彼が遠隔地にいながらにしてマスリパトナムに対する支配力を強める一方、現地在住の支配者としてのハヴァールダールの権限が低下するという現象が見られた。

第2章のⅢでは、ゴールコンダ王国におけるミール・ムハンマド・サイードの活動の全盛期である1640年代の状況について見る。当時、彼はインド洋の東西両海域にまたがる活発な航海・交易活動を行っていたが、その中でも最大の柱は1630年代に開かれたばかりのマスリパトナム－ペルシア湾航路を用いた交易であった。特に、最も重要な輸出品であった織物の取引を有利に進めるため、市場の要求する種類の布の生産・入手が促進された。ペルシア市場をめぐるオランダ・イギリスの東インド会社との間で激しい競争が展開された。一方、その頃のハヴァールダールはミール・ムハンマド・サイードの活動を支える役割にほぼ終始し、ますます従属的な存在になっていた。

続いてⅣでは、ゴールコンダ王国内部においてミール・ムハンマド・サイードに対する敵意が顕在化し始めた1640年代末から、1656年初頭に彼がゴールコンダ王国を離れムガル朝に仕えるまでの時期について述べる。1649年に見られたハヴァールダール交代の背後には、彼と宮廷との不和の兆しが既にうかがえ、これ以後彼はゴールコンダ王国から離脱する動きを強めていった。その中で彼は内陸の要衝ガンディコタを自分の勢力の中心地として確保しただけではなく、海上交易の拠点についてもマスリパトナムから南のプリカートへと移動させようとしていた。その後彼がゴールコンダ王国を離れると、それまでの軍事遠征で占領していた南のカーナティック地方については領有権が一時間問題となったが、やがてこの地方はゴールコンダ王国の武将によって再征服された。一方マスリパトナムにおいては、ゴールコンダ王国の中央から送り込まれたハヴァールダールによる統治という従来の支配体制が復活した。

第3章「マスリパトナムをめぐる人々」においては、主にオランダ東インド会社の商館日記に見られる町の高官や有力者などの姿を通して、マスリパトナムをめぐる政治権力や経済活動の有様について述べるとともに、この港市の社会の特質について考える。まずⅠでは、17世紀のマスリパトナムの社会を構成していた人々について、史料上確認できるその出自や職業などから概観する。Ⅱにおいては町の高官たちに注目し、特にハヴァールダール以外の役職者である、シャー・バンドル(shāh-bandar)、コトワール(kūtwāl)についてとりあげる。さらに、役職は持たないものの町の有力者と見なされていた大商人の代表的人物であるミール・カマルッディーンの経歴や活動のほか、マスリパトナムの社会において彼が果たした役割についても見る。当時この港に商館を置いていたヨーロッパ各国の東インド会社と、彼との間には持ちつ持たれつの関係があり、宮廷の有力者との親密な関係を持っていた彼の仲介者としての役割は会社にとって重要であった。

Ⅲにおいては、ペルシアの大使ムサー・ベグのマスリパトナム訪問という事件を通して、ペルシア系の人々が多く活躍した町としてのマスリパトナムの社会の一面に光を当てる。ムサー・ベグはサファヴィー朝がオランダに派遣した大使であったが、帰国途上の成り行きで1627年にマスリパトナムにきた。彼を迎え受け入れたこの町の有力者層の対応は、彼らが「ペルシアの大使」は賓客として待遇すべき存在であるとの価値観を共有していたことを示している。

第4章「ゴールコンダ王国スルターンとマスリパトナム」では、マスリパトナムの町や、ここを拠点とする航海・交易活動に対してゴールコンダ王国スルターンがどのように関与したかについて、歴代君主の中でも港市と多くの関わりを持ったスルターン・アブドゥッラー(1626-1672)の治世を中心に考察する。Ⅰにおいては、まず彼に先立つ歴代の君主たちが、マスリパトナムを含む沿岸地域に対してどのように支配権を確立していったのかについて概観し、その後、16世紀末に始まる「王の船」、すなわちスルターンの所有あるいは出資による船の活動について述べる。マスリパトナムからの「王の船」

の派遣にあたっては、初めポルトガルから航海許可証が獲得されたが、間もなくゴールコンダ王国とポルトガルとの関係が悪化したため、17世紀になるとオランダの許可証が利用されるようになった。当時の「王の船」の行き先としては紅海沿岸のムハーが知られている。スルターン・ムハンマド（1612-1626）の時代には、1月にマスリパトナムを出帆し、9—10月に帰港するというスケジュールでほぼ毎年、「王の船」の派遣が繰り返された。その派遣の目的としては、巡礼者を運ぶことと同時に、貨幣や馬の輸入が挙げられる。このような「王の船」の活動と関係して、スルターンはマスリパトナムでの出来事やヨーロッパ人との間に生じた問題にも関わっていた。

続いてⅡでは、1049/1639-40年に行われたスルターン・アブドゥッラーのマスリパトナム訪問について取り上げる。これはゴールコンダ王国スルターンによる初めての港市訪問として知られるものである。アブドゥッラーはマスリパトナム滞在中に港の内外の諸地区を回って、様々な新しい体験をした。また、宮廷においても以前から関心が持たれていた西アジア方面の知識に加えて、マスリパトナムとの間を船が往来している他の国々についての知識を得て、各地から訪れる人々と接触する機会を持った。このことは、次のⅢで見るアブドゥッラーの時代の「王の船」の活動に影響を及ぼしたものと考えられる。

アブドゥッラーの「王の船」の派遣は、まず西アジアへの巡礼者を運ぶという従来の目的を掲げた活動として確認される。しかし、1630年代にペルシア湾への航路が開かれていたことから、バンダレ・アッバースのようなペルシア湾沿岸の港が新たな目的地として挙げられるようになった。アブドゥッラーの時代の「王の船」の活動の特徴としては、この他に、ベンガル湾交易への参加が数多く見られたことが指摘できる。特に1660年代には東南アジア各地の港市国家の君主たちとの間で、親書や使節の交換と同時に交易活動が行われていた。

このような「王の船」の活動を踏まえつつ、第4章のⅣにおいては、1660年代以降のゴールコンダ王国と、オランダを中心とするヨーロッパ諸国との関係について考察する。特に注目したのは、オランダ東インド会社のハイデラバード商館をめぐる、ゴールコンダ王国とオランダの攻防である。まず王都における商館開設に至るまでの背景を、ゴールコンダ、オランダそれぞれの立場から見た後、オランダによる都への商品輸送に対してゴールコンダ王国側が取った政策について述べる。本来港市での活動を想定して与えられていた免税特権を利用して、内陸に商品を輸送しようとしたオランダの活動を、スルターンは当初厳しく禁止した。輸送途上にあった商品が全てマスリパトナムに返送させられたこともあった。しかし、1663年に起こったハイデラバードにおける大火の後、おそらく王都における商業活動の低下と物資の不足が生じ、スルターンはオランダによる都への商品輸送を認める。以後、オランダは、マスリパトナム－ハイデラバード間の治安の悪化とそれに伴う商人たちの活動の低下を利用する形で、ハイデラバードへの商品流通に入り込み、ハイデラバード商館は大きな利益を上げた。その頃ゴールコンダ王国の支配力は弱体化しつつあり、このオランダの活動を再び禁じる力はスルターンにはなかった。オランダのハイデラバード商館の活動が活発になる一方で、マスリパトナムにおける商業活動は次第に低下していくことになった。

このようなマスリパトナムでの経済活動の低下は、ゴールコンダ王国最後のスルターン・アブール・ハサン（1672-87）の時代になってますます進んだ。長らく重んじられてきたペルシア系の人々に代わってバラモン出身の兄弟が重用され、内政の変革が進められる中で、マスリパトナムにおいてもペルシア系の人々の活動が衰退し、多くの人々がこの港を離れた。ここから紅海・ペルシア湾方面へ向かう西方への航海活動もほとんど見られなくなった。王国の政治・社会状況の変化は、こうしてマスリパトナムの経済活動にも直接的に大きな影響を及ぼした。そして最終的には1687年にはムガル朝によってゴールコンダ王国が滅ぼされ、これを以て「ゴールコンダ王国の主要港」としてのマスリパトナムの役割もまた終わりを告げたのであった。

論文審査の結果の要旨

マスリパトナムは、インドのコロマンデル海岸に位置し、特に16—18世紀にベンガル湾沿岸とインド洋や紅海、ペルシア湾の諸港との交易によって繁栄した港湾都市であった。本論文は、17世紀初頭からこの地に商館を設置していたオランダ東インド会社の文書を主要な史料とし、これをペルシア語の年代記史料と対照検討する作業を通じて、デカン高原のゴールコンダ王国によるマスリパトナムの支配の実態を解明することを課題とするものである。第一章で論者は、マスリパトナム

の徴税を請け負うとともに、行政を執行したハヴァールダールという役職について、その受任者たちはゴールコンダ王国の中枢にいた有力者からいわば個人的に任命された者であったこと、従って政権中枢部における権力の移動は、ハヴァールダールの交代をもたらしたことを明らかにした。また彼らの中には、オランダのもたらす商品を独占的に買い付け、船舶を所有して自ら交易を行い、こうして蓄えた力を背景に王国の宰相にまでなった者があることを指摘した。第二章では、そうしたハヴァールダール出身の宰相の一人である、ミール・ムハンマド・サイード・アルディスターニーに注目し、彼が宰相に昇進後もマスリパトナムに対する支配権を維持、強化したこと、1640年代には、インド洋の東西両海域にまたがる交易活動に参入し、とくにインド産織物の輸出先であったイランの市場を巡っては、オランダ、イギリスの両東インド会社と激しい競争を展開したこと、しかし、最終的に権力中枢における敵対勢力の台頭により、王国を去ってムガル朝に仕官するに至り、マスリパトナムにおいては、中央から送られたハヴァールダールによる統治が復活したという興味深い経緯が明らかにされた。第三章は、主にオランダ東インド会社の商館日記に基づく、マスリパトナムの社会構成の分析に充てられる。住民の多数はヒンドゥー教徒であり、そのうちには仲買人や代理商として、ムスリム商人やヨーロッパ人と取引関係を持った者や、主として沿岸を往来して穀物輸送に従事した者があったが、この社会の上層は主としてイラン系の移住者であるムスリムによって占められ、税関や警察の長官のみならず、無役の有力商人もこのグループの出身であった。論者は、サファヴィー朝がオランダに派遣した大使が帰国の途上成り行きでマスリパトナムを来訪した一件、就中その滞在中にこの大使がマスリパトナムのハヴァールダールと英国商館とを仲介して、監禁されていた英国人商館員を釈放させた事件に注目し、この地のムスリム住民の間においてイラン本国を尊重する観念が存在し続けたことを立証した。第四章では、ゴールコンダ王国のスルターン自身が、マスリパトナムの町とここを拠点とする航海や交易にどのように係わったかが検討される。16世紀末、スルターンの所有もしくは出資にかかる「王の船」の派遣が開始され、オランダからの航海許可証を得た「王の船」は、ほぼ毎年紅海沿岸のムハーに向けて巡礼者を運び、馬や貨幣を輸入していた。1630年代にマスリパトナムとペルシア湾との間に航路が開かれ、「王の船」はバンダレ・アッパースなどペルシア湾岸のイランの港へ向かうようになり、巡礼者もイランからイラクのシーア派の聖地を経由して、メッカへの道を探るようになった。この間、「王の船」はベンガル湾交易にも参入し、東南アジア各地の港市国家との間で使節を交換し、交易を行った。こうした王国の支配者による交易の重視の現れの一例として、論者は1639-40年に行われたスルターン・アブドゥッラーによるマスリパトナム訪問に注目し、ペルシア語年代記とこの訪問を目撃したオランダ人とイギリス人の記録を照合して、この出来事の経緯を復元するとともに、旅行を通じてスルターンはペルシア湾とベンガル湾の航海と交易について多くの情報を獲得し、そのことが「王の船」の派遣を更に活性化させる原因となったことを明らかにした。最後に、論者は1660年代以降のゴールコンダ王国とヨーロッパ諸国、就中オランダ東インド会社との関係を取り上げる。論者によれば、オランダは本来マスリパトナムでの活動に対してのみ与えられていた免税特権を利用し、首都のハイデラバードへ商品を直接移送しようと試みては実力で阻止されていたが、1663年の首都の大火によって物資が欠乏したことをきっかけに、首都に商館を設置することを認められて大きな利益を上げるようになった一方で、マスリパトナムにおける商業活動は相対的に低下したとされる。また、ゴールコンダ王国最後のスルターンの代になって、バラモン出身者が権力を掌握してイラン系の廷臣が排除された結果、イラン系の人々はマスリパトナムを退去して、紅海、ペルシア湾方面との交易は途絶し、1687年に至って王国はムガル朝に併合され、ゴールコンダ王国の主要港としてのマスリパトナムはその歴史的役割を終えたと結論される。

アジア各地の港市とそれらを結ぶ交易活動は、近年頃に関心を集めている研究分野であり、文書史料の丁寧な検討に基づく本論文の寄与するところは極めて大きい。しかしながら、いくつか問題がないわけではない。オランダ語文書の検討が極めて細緻に為されているのに比して、ペルシア語文献の読み込みにはやや不満足な点が遺る。例えば、論者が言及するイラン系の人々の内には、付された敬称、称号からして明らかにシーア派のウラマーであると判断可能な者たちが複数含まれているが、論者はこの点を見逃している。また、オランダ東インド会社の活動全体に占めるマスリパトナムの位置も検討されてしかるべきであったと思われる。しかし、これらはいずれも細瑾と言うべきで本論文の価値を著しく損なうものではない。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2006年4月14日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。